



“若い”研究者の一人として

細胞生物化学研究部・教授
福田 穰

アメリカで18年余り研究生活をしておりまして、思いもかけず伝統ある日本の糖鎖生物学のメッカである医科研の細胞生物化学研究部を継ぐことになりました。久しぶりに日本に帰って来て、まったく変わっていないことと変わったことに気がきました。その内二つの点についてここで述べさせていただきます。

変わっていないと強く感じたことは日本では女性の地位がまだ低いということです。とにかく大学をざっと見渡して女性の助教授・教授が相変わらずとても少ないことに気がきます。私の属していたラフォイや癌研究所では助教授クラス以上の人の約半数が女性で、かつそれは正教授クラスの人の場合でも同様です。アメリカではlife scienceの分野で博士号を取る人の半数近くが女性ですからそれに比べて日本の場合まずそこでの改善が必要でしょう。更に助手、助教授への採用そのものが低いと感じますからそこでも改善は必要だと思えます。

変わった大きな点は、日本の第一線の研究者が物事をはっきり言うようになったということです。これには感動に近いものがあります。ただ一方で、日本の科学全体をどう発展させていくかを自分の研究の発展を目指すなかでも考えていくという一種の「ロマン」に欠けている場合が多々あると感じます。自分の研究が世界の研究の中でも一流に伍する必要があるということが余裕を失わせているのかもしれませんが、しかし個々の研究のレベルは一般にはその分野全体のレベルに大きく規定されています。第一線にある研究者が、いつまでも“若い”研究者の気持ちを忘れず“大きな夢”を失って欲しくないというのが私の偽らざる願いです。



医科研に赴任して

病院 放射線科
戸辺 公子

東京大学医科学研究所の門をくぐり緑あふれる庭園を道なりに進んで行くと、ところどころ崩れ落ちた煉瓦造りの建築物が見え隠れしてきました。時の流れとはまったく無関係の世界が目前に広がっていました。ここは本当に東大医科研病院なのかしらと不安になりました。中に入ると玄関はまるで分院を彷彿させるかのようで、地下が放射線室ということでした。配管丸見えの廊下を歩いていると、すぐに技師さんと先生が出てきて案内してくれました。ここで使用されている放射線装置はこの時代がかった建物とはまったく異なり、最新型のCT、computed radiography (CR)、血管造影装置、核医学検査装置がならんでいました。しかもそれらがネットワーク上でオンラインになっておりデータの提供、保管に関してまで考慮して設計されていました。医学の進歩には画像診断が大きく寄与してきたことはいうまでもありません。しかし診断能は画像診断装置の性能に左右されるというのが現状です。ここでもこれら最新の装置を使ってより早く診断ができるようになったようです。

この病院に就任し患者さんに接し感じたのは、患者さんが非常に明るいことです。非常に予後の悪い疾患の患者さんが笑顔を見せて放射線科を訪れるのです。私ども放射線科は各病院で内科、外科、その他種々の科の患者さんをみますが、こんなことは今までの病院ではまずみられなかったことです。病院スタッフ皆が患者さんのために努力している結果だと思えます。昨今、一般の病院では頻回の検査と薬物投与が主であり、患者の精神面は比較的にしろにされ問題になっているようです。そんなことは当てはまらないようです。さらに対象症例は、非常に高度で専門的な疾患、また稀なもの、進行度の高い悪性新生物等多方面にわたっており、それぞれの方面で先生方は積極的に診療されているというのが実感です。

外観は廃墟のような建物ですが、そこで展開されているのは最新高度医療であり、スタッフも、診療機器面も非常に充実している非常にいい病院であるというのが素直な印象です。

CLINICAL RESEARCH WARD

附置研病院が担うべき役割などを協議

去る6月8日(水)、国立大学附置研究所附属病院長会議が、当研究所を会場に開催されました。

この会議は、現在、東北大学加齢医学研究所、金沢大学がん研究所、京都大学胸部疾患研究所、九州大学生体防御医学研究所及び当研究所の五つの研究所で構成されており、年1回輪番制によって開かれるもので、今回で29回目になります。

当日は、浅野附属病院長をはじめ梅原事務部長、藤村附属病院長(東北大学)、磨伊附属病院長(金沢大学)、人見附属病院長(京都大学)、鈴木附属病院長(九州大学)らのほか、文部省からも関係者が出席しました。

はじめに、当番校である当研究所の浅野附属病院長の挨拶に続き、各出席者の自己紹介、そして高杉医学教育課大学院指導室長から「国立大学病院に係る諸事項」について説明がありました。

議題では、(1)附置研究所附属病院が担うべき役割について、(2)附置研究所附属病院がおかれた現状認識について、(3)附置研究所附属病院の将来のあり方について、に対する各病院の考



え方が述べられた後、活発な意見交換がありました。なかには、先端的项目診療、統廃合計画等も話題に上がりました。

また、会議後には、骨髄移植等の治療が行われる無菌病棟、今年3月に完成(改修、改築)した看護婦宿舎を見学されました。

次回は、九州大学生体防御医学研究所を会場に開催される予定です。